



小学校の地域学習を通して得られる資質能力とは : 京都府南丹市立美山小学校における児童向けアン ケートから

籾谷, もえ
河本, 大地

(Citation)

兵庫地理, 69:133-142

(Issue Date)

2024

(Resource Type)

journal article

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100489587>



小学校の地域学習を通して得られる資質能力とは —京都府南丹市立美山小学校における児童向けアンケートから—

簗谷もえ・河本大地

I. はじめに

1) 研究の目的と背景

本研究の目的は、小学校の児童に地域学習を通してどのような資質・能力が育まれているのかを、評価の3観点から明らかにすることである。

学習指導要領の目標および内容は、2017年(平成29年)の改訂で資質・能力の3つの柱で整理された。各教科における観点別学習状況の評価の観点は、小・中・高等学校の各教科等を通じて「知識・技能」「思考・判断・表現力」、「学びに向かう力・人間性」の3観点到まとめられている。特に「学びに向かう力・人間性」は、変化の激しい社会の中で、未来を担う子どもたちが「どのように社会や世界と関わり、よりよい人生を送るか」に関わる力を得ることを目的としている。

都市部から離れた農山村地域で育つ子どもたちには、自分が暮らす地域の価値を見いだして育てていく、「場の教育」に大きな可能性があると考えられてきた(岩崎・高野、2010)。そこでは、地域に学ぶことによって、ただ目の前にあるだけの「他人事だった無機質な地域」は、身近な「自分事としての意味ある地域」に一変するという。〈認識としての場〉そして、〈認識としての場〉を発見した人々は、次に〈構造としての場〉をそれにふさわしいものに変えるための動きをはじめた。このような多数のプレイヤーが「地域そだて」を実践していくことで地域は変わっていく。すなわち、「地域に学び、学びの主体が変えられ、今度は地域づくりの広い担い手として、地域に働きかけ地域を変える」という。このように、少子化が進み、学校の統廃合も進行する中、地域学習(ふるさと学習、郷土教育等の表現も用いられる)の重要性が強調され、学校と地域が十分に連携し子どもを地域と共に育てていくことが強く求められている(宮崎、1995; 河本・板橋・岩本、2017; 河本、2024など)。

他方、少子化等に起因する学校統廃合は、地域学習の展開に大きな変化をもたらす。学校は地域社会における拠点的功能を有してきた(酒川、2004)。学校統廃合はそこに大きな負の影響をもたらす。学校で行われる地域学習においても同様の懸念がある。この点に

ついて、大辻・河本(2021)は、奈良県十津川村の小学校の事例を検討している。地域の人々と密接に関わるような活動を行うことは難しくなるが、「人材マップを作り地域の人との関係性を絶やさない工夫をすること、また、児童が地域学習に関心を持ち、そこから日常生活の行動へとつなげ、愛着を育んでいくためにも、地域の人だけではなく、PTAなど保護者や家庭からも協力を得ることのできる体制を作っていくことが重要」と述べている。「地域の人から地域について教わるという活動だけでなく、保護者も一緒に参加できるような地域学習を行うことで、学校としては保護者の協力を得ることができ、児童にとっても家庭でも学びが引き継がれるきっかけとなるだろう」としている。

こうした地域学習は、小学校においては児童の将来における社会認識の土台を築く学習過程であることから、宮崎(1995)にみられるように社会科を中心に展開されてきた。しかし、「総合的な学習の時間」が2000年から段階的に導入されてからは、社会科とは別にそちらを中心に展開されることも多くなっている。

「総合的な学習の時間」は、新しい時代に生きる子どもに「生きる力」をつけようと志向されたものであるが、教育内容・評価ともに手探りの状態で多くの教師が不安を感じており、教育現場では基礎学力と乖離する代物として扱われることもある(井上、2002)。森山(2010)は、「総合的な学習の時間」が適切に実施されているか、各教育委員会の指導の下で点検・評価が必要とし、学校経営評価の一環に取り込んで学校長のリーダーシップのもと、全教職員が組織的に積極的に取り組む体制が求められるとしている。

本稿が対象とする京都府南丹市立美山小学校では、美山中学校とあわせた9年間一貫の「美山学」において、地域と学校が密接に結びつき、地域で地域の子どもを育てる取り組みが数多く行われてきた(南丹市立美山小学校、2018、2021; 大東、2020; 高原・河本、2023; 村田・山口、2023)。「美山学」とは、美山小学校・美山中学校における地域と連携・協働による教育活動およびその体系のことであり、育みたい資質能

力を整理して地域資源を活用した学習を教科横断的に幅広く行っているという特徴がある。

2) 研究方法

2023年12月に、京都府南丹市立美山小学校1～6年生の全校児童計126名（同年5月1日現在）を対象にアンケートを実施した。回答は109名から得られた。このアンケートは、子どもたちが美山に関する学習を通して、どのような力を身に付けることができていると感じているのか、「知識・技能」「思考・判断・表現力」「学びに向かう力・人間性」の評価の三観点から考察することを目的に実施した。また、児童が美山学（地域学習）に対して肯定的なイメージをもっているのかを検証したいと考えた。

美山小学校では、学校評価アンケートを中間期・年度末の2回にわたり実施し、次年度以降の学校経営に反映させる取り組みを行っている。このうち「児童アンケート」では、子どもが自ら何かを行いたい・主体的に物事に取り組もうとする、「学びに向かう力・人間性」の評価と深く関係している。したがって、アンケート票作成にあたって参考にした。

アンケート票はGoogle フォームを用いて作成し、1 とても当てはまる、2 少し当てはまる、3 あまり当てはまらない、4 まったく当てはまらない、5 分からない、の計5段階で評価を行った（1・2年生向けはひらがな表記）。また、3～6年生向けには記述式の回答欄を設け、5段階評価では得られないより具体的な回答を得たいと考えた。これは、「児童アンケート」において、「やや思う」の回答がさまざまな設問で多数みられたことによる。「やや思う」という回答には「思う」と回答できない何らかの理由があると考えられることから、児童は何に対してひっきりりを持っているのか明らかにしたい。そこで、「少し当てはまる」や「あまり当てはまらない」に焦点をあてる。

なお、美山小学校では、2023年11・12月に訪問した際、校内においては教職員が「美山学」という表現を用いる機会は少ないと聞いたため、該当する設問の表現は「美山についての学習」「美山に関する学習」とした。

3) アンケート実施前の仮説

アンケート実施前に美山小学校・中学校を訪れ、校長や教諭等と話し、実際に子どもたちを目にしている立場からの意見を交えて、いくつかの仮説をともに立てた。

第1表 アンケート項目

美山についての学習は好きですか？
美山に関する学習で印象に残っている授業や体験はありますか？
美山に関する学習について、内容や取り組みを他の人に説明することができますか？
美山町のために力になりたいと思いますか？
地域の皆さんと関わることは楽しいですか？
話し合いや友達と協力することは好きですか？
頑張りを褒めてもらうことは嬉しいですか？
感じたこと・思ったことを相手に伝えることは得意ですか？
みなさんはお友達の良いところを見つけることができますか？
自分で目標を立てる事が得意ですか？
美山のどこの地区（ちく）に住んでいますか？ 宮島地区・鶴ヶ丘地区・大野地区・知井地区・平屋地区
美山に関する学習で思い出に残っていることは何ですか。理由も教えてください。
小学校でおこなう美山に関する学習を行うにあたって、調べたいこと・体験したいことは何ですか。

たとえば、コロナ禍で中止していた町内ホームステイを2023年度に経験した5年生については、経験できなかった6年生に比べて「美山に関する学習は好きですか？」の問いに対して「とても当てはまる」と回答する児童が多く見られるのではないかと、「美山に関する学習で思い出に残っていることは何ですか？」に対して多くの児童がホームステイと回答するのではないかと考えた。学校外での体験活動であることに加え、1泊2日にわたり地域の方と寝食を共にすることは、子どもたちにとって初めての経験であることがほとんどである。さらに、美山中学校の校長先生によると、中学生になった今でもホームステイの話になると子どもたちは目を輝かせて語るといふ。

また、「話し合いや友達と協力することは好きですか？」に対しても、肯定的な回答が得られると考えた。美山に関する学習では、各回に事前学習・現地学習・まとめの時間がとられていることが多い。そのため、積極的に友達と会話をし自分の意見を伝えたり相手の意見を聞いたりする機会が多くなっていると思われる。また、このことは、評価の観点の3つの柱のうちの1つである「学びに向かう力・人間性」にも大きくつながっている。

さらに、「地域のみなさんと関わることは楽しいですか？」の問いに着目した。コロナ禍で活動が制限されてしまったことから、地域の人と共に活動する機会が減ってしまったことが関係するのではないかと考えた。

美山に関する質問項目「美山に関する学習は好きですか？」「美山に関する学習で印象に残っている授業や体験がありますか？」「美山町のために力になりたいですか？」に着目すると「とても当てはまる」と回答した児童は、3項目共通で肯定的な回答をした時、今後「小学校で行う美山に関する学習を行うにあたって、調べたいこと・体験したいことはなんですか？」に対して具体的なイメージ(美山の歴史・建物・伝統)などを持っていると考えられる。

同様の項目(美山に関する質問項目)の「少し当てはまる」に着目するとばらつきがみられた際には、「少し当てはまる」に回答した児童では、「当てはまる」に近い回答と「あまり当てはまらない」に近い回答のように1つの回答の中で大きな差が見られるのではないかと推測した。

「自分で目標を立てることは得意ですか？」の問いに対して、「まったく当てはまらない」と否定的な回答をしている児童は、今後「小学校で行う美山に関する学習を行うにあたって、調べたいこと・体験したいことはなんですか？」に対して、具体的な回答が得られない可能性も考えられる。記述回答中では特に自ら目標を立てたり、ゴールを見つけたりすることに、強い苦手意識を示す児童も見られると考える。

Ⅱ. 研究対象地域の概要

1) 京都府南丹市美山町の概要

研究対象地域である京都府南丹市美山町は、京都府中部(丹波地方)に位置する中山間地域で、町面積の約97%(331.47km²)を山林が占める、南丹市最北部の地域である。

美山町は、他の中山間地域と同様に、少子高齢化や過疎に悩まされている。しかし一方で、1993年に北集落が国の重要伝統的建造物群保存地区に登録され「かやぶきの里」として知られるようになるなど観光資源に恵まれており、観光入込み客数が顕著に増加している。エコツーリズムやグリーンツーリズムといった「ふるさと観光」の系譜にも位置付けられる新たな観光スタイルを提示したことで、2001年の「優秀観光地づくり国土交通大臣賞金賞」に選出されている。また美山町は、2022年には国連世界観光機関(WTO)が選

定する「ベスト・ツーリズム・ビレッジ」のひとつにも選ばれた。

2) 美山小学校・「美山学」の成立

南丹市美山町内には、宮島小学校・鶴ヶ丘小学校・大野小学校・平屋小学校・知井小学校の5校の南丹市立小学校があった。少子化に伴い、2016年にこれらが統合再編され、南丹市立美山小学校が開校した。旧5校では、育友会や読み聞かせ団体の活動など、地域が主体となって学校を支援する例がみられたし、地域学習は各校において実際に地域の人と関わりながら進められた実践が多かった(高原・河本、2023)。また特別活動における交流や、地域と合同での行事開催など、密接な連携が見られた。このように美山町では学校と地域との連携・協働が早くから活発であった。

そこで、校区が再編されたことにより生まれた、地域と学校との心理的距離間を縮め、学校と地域の連携・協働体制を機能させるべく、新たな教育カリキュラムの構築が図られた。美山小学校では、従前から存在していた美山中学校が同一校区となることもあって、地域との連携・教育活動を「美山学」と位置づけ取り組んできた。同校では、「美山学」と「単なる地域学習」との違いを「地域との協働」と説明しており、社会に開かれた教育課程の実現として「地域」の教育に対する意思を取り入れた地域とともにある学校づくりを推奨してきた(村田・山、2023)。

「美山学」には、2016年の統合前に存在した5つの小学校の取組も引き継がれている(高原・河本、2023)。調べ学習・作文指導・へき地教育などに関する先進的な取組は、「美山学」の基盤となる中心的な役割を果たしている。

3) 美山学の内容と取り組み

先述のように、京都府南丹市立美山小学校・中学校では、「地域との連携・教育活動」を「美山学」と位置付けている。美山小学校では、社会に開かれた教育課程の実現として「地域の教育に対する意思を取り入れた地域とともにある学校づくりを推進する」ことを図っている(村田・山口2023)。また、「美山学」実施によって目指すものについて、「①地域の誇りと愛着を醸成、②地域について学ぶ、地域資源の継承、③地域の人と交流、主体としての意識を育む」の三点が掲げられている(南丹市立美山

小学校、2021)。さらに「美山学」の実践を通じて、「児童の地域に対する理解と愛着・誇り、地域の学校教育に対する理解が深まり、地域の活力も向上していくことにもつながると考える」と述べ、「学校と地域双方が互いにその恩恵を受けられるWin-Winの関係を構築していくことこそが「美山学」が目指す姿である」としている（南丹市立美山小学校、2018）。

「美山学」のねらいは、南丹市立美山小学校（2018）によると、「教科横断的な学習を構成し、地域の教育資源である「人、物、自然、文化」を教材として取り入れたり、地域に働きかけたりすることで、児童が、学ぶ喜びや充実感を味わい、学習意欲や追究意欲を高め、他人と協調していくことや他人を思いやる心、美

しいものに感動する心を養うなど、豊かな人間性や社会性を培うことを目指すものである。さらに、ふるさとを愛し、地域の一員として地域に貢献したり、地域を大切にしたりする実践的な態度を培いたいと考えている」とされている。

ここには、「地域のよさを発見する学習」と「自分のよさや可能性を発見する学習」という二つの側面が存在している。前者では「美山の一員としての自覚の芽生え」を、「自ら課題を見出し、課題を解決する力」「自らの考えや願いや思いを伝える力」「自然、文化、歴史、産業に関する理解」「『美山』を愛する心」の修得を通じて育みたいとしている。後者では「自己肯定感・自己有用感の高まり」の獲得を目指し、「人間関係を豊かにする力」「情報に精通し活用する力」「勤

第1表 美山学9年間のねらいと体系

	学年	ねらい		
		地域のよさを発見する学習 (美山の一員としての自覚の芽生え)	自分の良さや可能性を発見する学習 (自己肯定感・自己有用感の高まり)	
小学校	1	学校探検や地域の行事を通して、美山の里の人々の存在に気付く。	意欲と自信をもつて活動	地域の方とのふれあい活動により達成感や成熟感を味わい、自分への自信につなげます。
	2	地域探検や地域の行事を通して四季の移り変わりを感じながら自然とかわる。		野菜栽培等により達成感や成熟感を味わい、自分への自信につなげます。
	3	美山のお宝探訪を行い、いろんな人と接し「美山」の魅力に触れる。	自分のよさや役割を自覚	地域の方との交流会等の計画・運営により自分のよさや役割に気付いていきます。
	4	福祉・環境・高齢化社会に即してお年寄りや保育園児とのふれあい、ゴミ問題、水路など先人の努力から現代社会を考える。		地域の美化活動やふれあい活動等により自分のよさや役割に気付いていきます。
	5	農業・産業、美山の特色ある農業について体験、聞き調べを行い、これからのよりよい農業や産業に生かす。	役立つ喜びを感じ、自分を生かす	米作り、農業体験等により勤労の尊さを実感し集団の中での役立つ自分の存在に気付きます。
	6	「美山の歴史」を調べ、地域の伝統文化、伝統産業、先人の業績を知り、これからの美山を考える。		夢探しや美山の地域興し活動への関わりによりこれからの自分に目を向け、可能性を信じ、歩みます。
中学校	1	伝統・継承・創造 (小学校の学びをつなぎ、広げ、深める)	職業観と勤労観を持つ	集団活動やボランティア活動により仲間との協力や集団の一員としての自分を見つめ生き方につなげます。
	2	美山の良さを再認識し、その上で課題		職業体験等により、働くことや生きることの意味を考え、これからの自分の生き方を考えます。
	3	に向き合い、地域の行事やイベントへの参加・参画や考案した企画を提案・実践する活動を通して、より深く地域に関わり、地域の活性化に貢献する。	自己実現に向けて歩み出す	様々な体験や進路講和・進路選択等により自己実現に向けて歩み出します。

南丹市立美山小学校（2018）を用いて作成。

労や職業に関して理解する力」の修得をを通じて育みたいとしている。

これらにもとづき、学年ごとにさらに具体的な「ねらい」が定められている。また、各学年における大きな体験学習として、2年生では地域の方と「野菜苗植え」を、5年生では地元の方の家に1泊2日で滞在する「ホームステイ」などが行われている。また、美山小学校では、美山（地域）に関する学習を「総合的な学習の時間」で完結させるのではなく、各教科と積極的に結びつけている。

Ⅲ アンケート結果

美山小学校 1～6 年生を対象にフォームを用いたアンケートを行い計 109 名の結果を設問と学年ごとに集計しグラフ化し、子どもたちが行ってきた美山に関する学習と結びつけて読み取る。

図 1 では、各学年の 90% を超える児童が、美山に関する学習に関して「とても当てはまる」「すこし当てはまる」と回答し、肯定的なイメージを持っている。自分自身の生まれ育った地域に関する学びを通し、地域への愛着が伺える。一方で、一部見られた「まったく当てはまらない」の回答では、2つの記述項目に関しても「思い当たらない」と記していることがわかった。

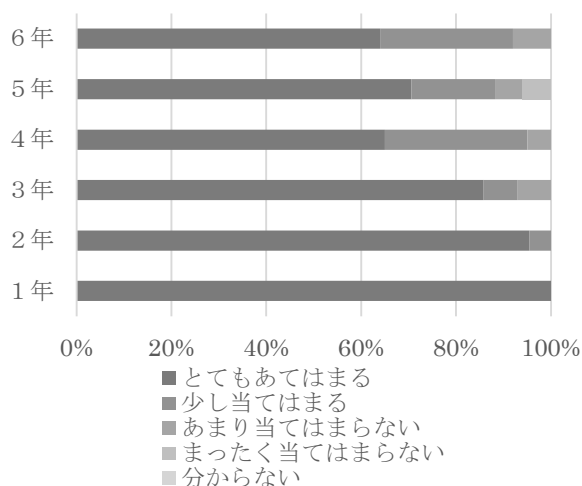


図 1 美山に関する学習は好きですか

図 2 では、高学年になると、少し当てはまると回答した児童の割合が高くなる。5年生では、4年生や6年生と比べて「とても当てはまる」と回答した割合が高い。「美山に関する学習で思い出に残っていることは何ですか」という記述項目を参照すると、ほとんどの児童が「ホームステイ」をあげた。美山に関する様々

な学習を行っている中で、宿泊を兼ねた地域のひととの協働学習は児童にとって印象深い体験活動であるといえる。

さらに、1年生・2年生の低学年に着目した際に1年生では「とても当てはまる」が 100%、2年生も「とても当てはまる」「すこし当てはまる」と評価の高い回答となった。美山に関する学習内容や回数としては中高学年に比べてあきらかに少ないはずだが、野菜を自分自身で栽培するなどの授業時間外でも自然と学習する機会が定着していることが強く関係しているといえるのではないだろうか。

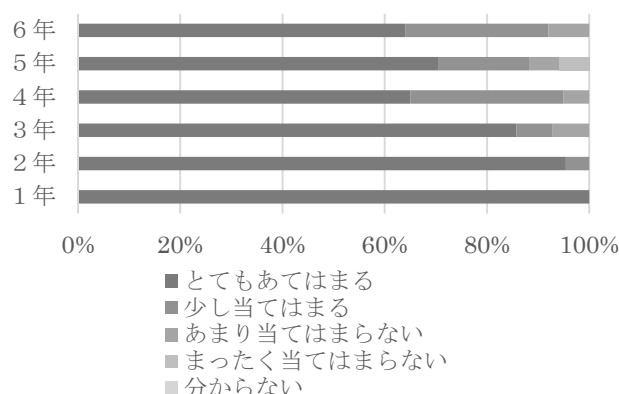


図 2 美山に関する学習で印象に残っている授業や体験がありますか

図 3 では、全学年を通して、「とても当てはまる」「すこし当てはまる」の回答が多く 90% を超える結果となった。美山学では、事前学習・現地学習・まとめの時間がとられている。

例えば、牧場見学では、事前に施設の方が学校を訪れ講義が実施される。現地に行く前に子どもたちは知識を身に付けたり、教えてもらったことをもとに気になったことやもっと知りたいことを自分自身で調べる活動を行う。また、その際に疑問に感じることや、現地で実際に見て学びたいことを明確化することで、現地に行った際に、より深い学びに繋がると考えられる。さらに、現地学習後に、各班でまとめを行い全体発表を行うことで学びの定着と新たな知識の獲得や発見が得られる。時間をかけ 1 つの活動を丁寧に行うことで、児童への地域学習の定着と、学んだ内容の他者への説明が可能になると考えられる。

また、中学生の記述項目「小・中学校での、美山に関する学習で学んだ力を今後どのように活かしていきたいですか」と関連付け考察を行った。回答の中で、「美山にきた人をおもてなししたい」や「美山にきた

人に魅力を伝えたい」といった地域の良さを伝える一員になりたいという思いをもった生徒が多くいる事がみてとれた。一方で、「特にない」や「別に活かしたくない」といった回答が見られた。このような回答をした生徒の別の回答を参照すると、どの設問に対しても「まったく当てはまらない」や「分からない」と回答している。

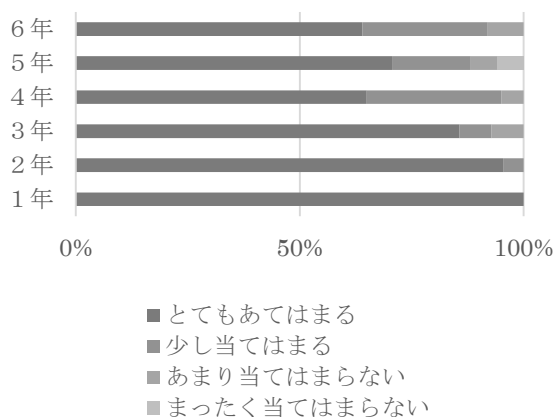


図3 美山に関する学習について、内容や取り組みを他の人に説明することができますか

図4では、「とても当てはまる」の回答が全学年を通して高く、学年を問わず自身が生まれ育った町に愛着があることがわかる。各学年で美山の歴史を学んだり体験したりすることで、児童の「もっと知りたい」や「町の力になりたい」という気持ちを後押しする。

また、5年生では「たくさん！美山の農業、特産品見つけた！」という美山町ならではの特産品について調べたり、平屋地区のブルーベリーにスポットを当て、ゲストティーチャーを招いて話を聞いたりする活動が行われた。なぜ美山町の特産品になっているかなどを、気候などから考えると共に、生産者の高齢化といった課題まで着目する内容となっている。記述項目である、「小学校でおこなう美山に関する学習を行うにあたって、調べたいこと・体験したいことは何ですか」とい質問に対して、特産品という回答が多々得られたことも、子どもたちの「地域のために」という思いが隠れていると考えられる。

図5では、全学年の約90%が肯定的な回答を示した。年代を超えた地域の方々との関わりは子供たちにとってかなり大きな影響を与えている。また、「美山に関する学習で印象に残っていることはなにか」という記述回答では、設問で肯定的な回答を示した児童の95%が、地域の方と協力して行った体験活動を挙げた。

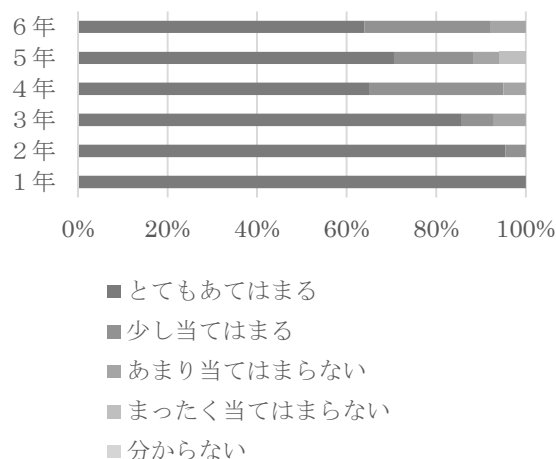


図4 美山町のために力になりたいと思いますか

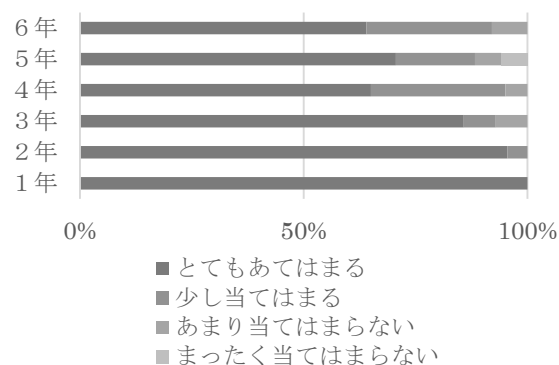


図5 地域みなさんと関わることは楽しいですか

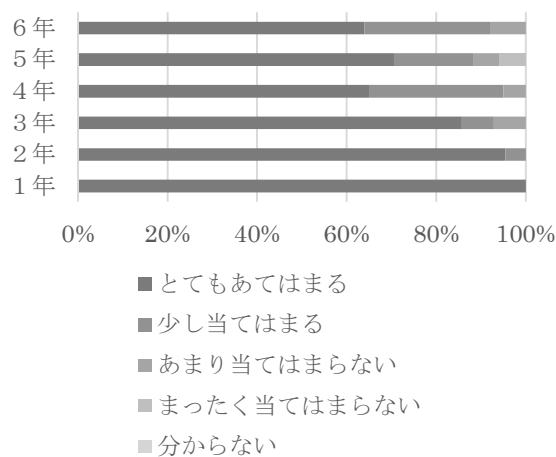


図6 話し合いや友達と協力することは好きですか

図6からは、低学年では、全児童が肯定的な回答を行い、周りの人と話したり、協力し取り組んだりする活動を好む傾向が見られる。しかし、中学年以降になると各学年とも一定数の否定的な回答をする児童がいることがわかる。「感じたこと・思ったことを相手

に伝えることは得意ですか？」と関連付けてみてみると、中学年を境に一気に否定的な回答の割合が多くなる。このことから、自分以外の人に何かを伝えたり、聞いたことをもとに考えを深めたりすることに苦手意識をもつ児童が増えていくことがわかる。

図7では、学年に関わらず、人に褒めてもらうことは児童にとって嬉しいことがわかる。4年生以降では、「少し当てはまる」の割合が高くなっている。本設問で「少し当てはまる」と回答した児童は、「友達のよいところを見つけることができますか？」において、半数以上が「あまり当てはまらない」と回答した。相手の良さを見つけることができると自信をもっていえる児童が少ないため、互いに褒め合うという機会そのものが減少しているのではないかと推察される。

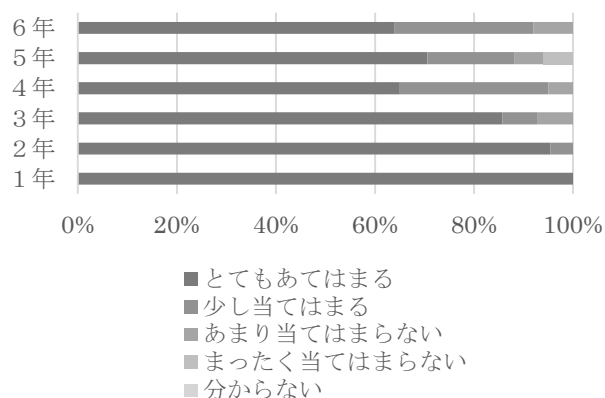


図7 頑張りを褒めてもらうことは嬉しいですか

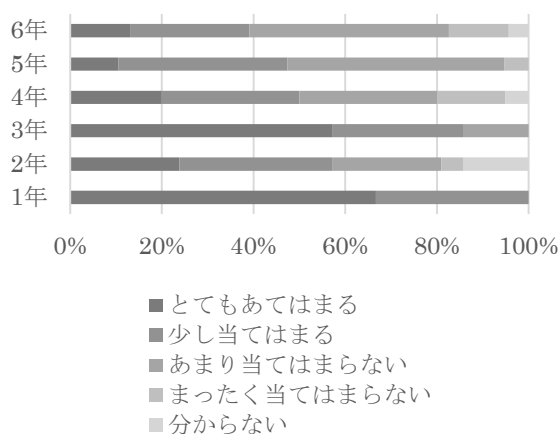


図8 感じたこと・思ったことを相手に伝えることは得意ですか

図8では、1年生では、全児童が肯定的な回答を示すも、3年生以降から減少し、4年生からは50%を下回る結果となった。また、各学年とも「少し当てはま

る」の回答の割合が高い。本設問で「少し当てはまる」と回答した児童の「話し合いや友達と協力することは好きですか？」という回答では、「とても当てはまる」が約65%に対し、「少し当てはまる」や「あまり当てはまらない」という回答が約35%いることがわかった。したがって、本回答の「少し当てはまる」には「とても当てはまる」という肯定的な意見と「あまり当てはまらない」に近い意見が見られ差が生じている。

図9では、5年生、6年生では否定的な回答が半数を超える結果となった。

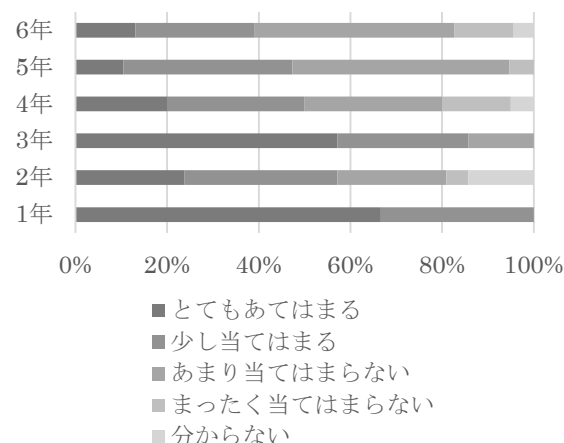


図9 友達のよいところを見つけることができますか

図10に関連して、少子高齢化の進展や単身世帯の増加によって、孤立する人びとがさらに増加することが予想されている。そのため孤立への取り組みは、国レベルでも自治体レベルでも重大な社会的課題となっている（石田、2013）。一見この課題と自分で目標をたてることの得意・不得意の関係性があるようには思われない。しかし、この孤立化が学校での集団生活からの孤立化にもつながり、集団の中で育まれる主体性の欠落が見られる。したがって、自ら課題を見つけ新たな目標を設定することは、現代の子どもたちの課題の1つとしてあげられている。アンケートの結果を見ても、学年が上がるにつれて「あまり当てはまらない」「まったく当てはまらない」といった自信を持たない回答が多く見られた。

自ら目標を設定するためには主体性が欠かせない。そもそも主体性とは、『広辞苑』（新村編、2008）によると「主体的であること。またそういう態度や性格であること。」であり、主体的とは、「①ある活動や思考などをなす時、その主体となって働きかけるさま。他のものによって導かれるのではなく、自己の純粋な

立場において行うさま。②主観的に同じ」と記されている。科学技術の進歩や情報化、国際化が進む中で、今後子どもたちが時代に取り残されないようにするためにも、この「主体性」を身に付けることが必要不可欠であり、結果からも今後の課題と言えるのではないだろうか。

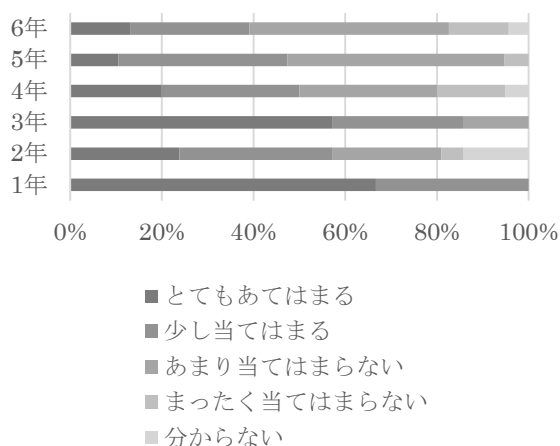


図10 自分で目標を立てることが得意ですか

IV アンケート考察

アンケートの結果を受けてクロス集計を行い考察する。加えて、クロス集計した設問の相関係数を計算し数値を出すことで、属性のあるものを見いだした。これらを、「美山学との関連」「美山学で得た力との関連」「非認知能力との関連」から考察する。

1) 美山学との関連

「美山に関する学習は好きですか」の回答に関して、全体の87%の児童が肯定的な回答をした。また、肯定的な回答を行った児童は、具体的にどのような活動が印象に残ったのかを詳細に記述し、さらに今後どのような活動を行いたいといった見通しを持つことができていた児童が多く見られた。一方で、否定的な回答をした児童は、記述回答の中で「ない」や「分からない」といった回答が見られた。

肯定的な回答をする児童と、否定的な回答をする児童の間で、「話し合いや友達と協力することは好きですか？」の回答の中で大きな差が見られた。肯定的な回答を行った児童は、こちらの回答に関しても肯定的な回答を示したが、否定的な回答を示した児童の半数以上が否定的な回答をした。

美山学では、友達と一緒に何かをしたり、グループで活動を行い報告したりといった活動が多いため、美

山に関する学習の好き嫌いとは協力することの好き嫌いは深く結びついており、このような結果が得られたと考えられる。

2) 美山学で得た力との関連

本アンケートでは3年生～6年生に記述式アンケートを行った。「美山に関する学習で印象に残っていることはなんですか。またその理由について教えてください」という設問に対して、グリーンワールドや田植え体験活動が多く見られた。理由として、知らなかった植物を知ることができた、友達と協力し達成感をあったなどの回答が得られた。

次に、小学校で実際に行われている美山に関する学習の内容と本アンケート結果を関連付けて考察を行う。「美山学」では、自然・文化・農業・観光・福祉など多岐に渡る分野で、地域を題材とした教育が行われている。具体的には、4年生で「グリーンワールド」と称する自然体験として芦生の森（京都大学芦生研究林）を活用し、芦生もりびと協会と連携して現地で自然体験を行う。例年、新緑の5月にゲストティーチャーによる話を聞き、生活を支える川の水の流れをたどりながら、芦生の森の自然と人の営みを体感する。9月には宿泊体験研修において、普段見ることができない夜の芦生の森で動物の様子を記録するなど大自然を堪能する。

「美山町のために力になりたいと思いますか？」と「自分で目標を立てることが得意ですか？」では、0.42と相関が見られた。地域の方と美山の自然の中で過ごしていくうちに、ふるさとに愛着を持ち、課題を見つけ、自分にできることを考えるきっかけにつながっている。このことは、記述回答にも顕著に表れており、「小学校でおこなう美山に関する学習を行うにあたって、調べたいこと・体験したいことは何ですか」に対して、「これからの美山を調べたい」という声が聞かれた。これまでの美山の歴史や、今この瞬間の美山を学ぶことは可能だが、これからの美山を見据えることができるのは、このような体験活動が重要な役割を果たしているのではないかと。

3) 非認知能力との関連

学習指導要領では、これからの子どもたちに身に付けさせたい力として、「生きる力」があげられている。さらに、子どもたちが自ら物事に取り組むことの重要性が多々記されている。アンケートの中では、「自分で目標を立てることが得意ですか」という質問に関し

て、約40%の児童が否定的な回答をし、「とても当てはまる」と回答した児童は、全体の26%という結果が得られた。これからの子どもたちに身に付けさせたい主体性と、現在の子どものたち意思には大きな溝があることがわかる。この溝を埋めるためにも、学校現場ではさらなる子どもの主体性を育むアプローチが求められる。

「自分で目標を立てることが得意ですか?」「みなさんは、お友達のよいところを見つけることができますか?」の設問のクロス集計では、相関係数が0.45で相関が見られた。美山学では、友達や地域の人と関わりをもって行う活動が多いため、自ら目標を立てたり、友達の良さを見つけたりとといった視野を広げる力にもつながっている可能性がある。

5年生と6年生の相関を見てみると、5年生の方が非認知能力の項目では「とても当てはまる」や「少し当てはまる」の割合が高かった。このことは、ホームステイを経験し地域の人と自然の中で非日常を体験することで培われたことが大いに影響していると考えられる。

V おわりに

アンケートを通して、美山小学校では「美山学」での活動を通して、地域に愛着をもったり、地域を知ることによって今後自分自身には何ができるのか見通したりすることができた児童が多く見られた。さらに、ホームステイでの宿泊活動を体験したり、グリーンワールドなどを通じて自然の中へと足を運んで学びを深めたりしていく中で、もっと知りたいことや調べたいことを挙げるなどの主体性が育まれている。

一方で、記述回答に「ない」や「分からない」と回答している児童は、選択項目でも「あまり当てはまらない」や「まったく当てはまらない」とほとんどが否定的な回答をしていることがわかった。今後、このような児童が地域学習に主体的に取り組み意欲を高めるためにどのような活動を行うべきか、アプローチの仕方を検討する必要がある。

なお、本稿では美山小学校の児童のアンケートを分析し考察を行ったが、同様に「美山学」を学んでいる美山中学校の生徒が小学校での学びの経験をどのように活かし、どのような見方をしているのか、そしてどのような資質能力を習得したと考えているのかを分析する必要があると考える。また、美山小学校でも、子どもたちや地域の状況をふまえ、また

教職員の働き方改革等の観点から、カリキュラムマネジメントを継続更新している。さらに、アンケートの設問の中には考察に十分生かしていないものも存在する。これらについては改めて別稿にまとめた。

謝辞

本稿を作成するにあたり、南丹市立美山小学校・美山中学校の皆様に大変お世話になりました。心より感謝申し上げます。

文献

- 石田光規 (2013) 孤立する人々の特性. 稲葉陽二・藤原佳典編『ソーシャル・キャピタルで解く社会的孤立—重層的予防策とソーシャルビジネスへの展望—』ミネルヴァ書房, pp. 37-55.
- 井上雅喜 (2002) 「総合的な学習の時間」における現状の問題点と今後の課題—私立中学校の事例も含めて—. 数学教育学会誌, 43, pp. 81-87.
- 岩崎正弥・高野孝子 (2010) 『場の教育—「土地に根ざす学び」の水脈—』農山漁村文化協会.
- 大東貢生 (2020) 学校を中心とした地域活性化の可能性について—南丹市美山町でのコミュニティ・スクールの展開から—. 佛教大学総合研究所紀要, 27, pp. 65-78.
- 大辻彩音・河本大地 (2021) : 学校統廃合が地域学習に与える影響— 奈良県十津川村の小学校を事例として—. 奈良教育大学紀要, 70-1, pp. 49-63.
- 河本大地・板橋孝幸・岩本廣美 (2017) : へき地小規模校を維持・発展させる沖縄県国頭村の教育システム—持続可能なへき地教育の体系の構築に向けて—. 奈良教育大学紀要, 66, pp.53-61.
- 河本大地 (2024) : 地域学習で社会を変えよう—地域づくりとESD (世直し教育) —. 斉藤俊幸編『地域活性化未来戦略』ぎょうせい, pp. 196-213.
- 酒川 茂 (2004) : 『地域社会における学校の拠点性』古今書院.
- 新村 出編 (2008) 『広辞苑』第六版. 岩波書店.
- 高原佳穂・河本大地 (2023) : 地域学習における学校と地域との連携—京都府南丹市美山町にあった小学校を事例として—. 奈良教育大学ESD・SDGs センター研究紀要, 1, pp.31-39.
- 南丹市立美山小学校 (2018) , 平成30年度研究紀要「自ら考え、伝え合い、学ぶ喜びを実感する児童の育成」～美山学の実践を通して～, p. 238.

南丹市立美山小学校（2021），令和3年度研究紀要

「探求的な学習を通して、よりよく問題を解決する資質・能力や主体的・協働的に取り組む態度を育成する授業の創造 ～自ら考え、伝え合い、学ぶ喜びを実感する児童の育成 ～美山学の実践を通して～」, p. 16.

宮崎正勝（1995）初等社会科における地域学習の意義と方法—話しあい、イメージ・マップ作り、物語作りを中心にして—. 教育方法学研究, 20, pp. 117-125.

村田翼夫・山口 満（2023）『過疎地の特性を活かす創造的教育—美山町（京都府）のケースを中心に—』東信堂.

森山賢一（2010）『総合的な学習の時間』の趣旨の実現と目指す学力. 教育実践学研究, 14, pp. 25-32.

（はたや もえ・奈良教育大学教育学部生、
こうもと だいち・奈良教育大学）